

お米について知ったこと

谷田部東中学校 七年 小松原 涼哉

日本の主食であるお米。日本の食文化に古くからなじまれてきた。ぼくの家でも一日に一回は必ず食卓に出てくる。つまり、毎日必ずお米を食べているということだ。そんなお米の歴史に興味をもち、調べてみると、約3000年前の縄文時代後期には、すでに大陸から稲作が伝わっていたということがわかっていそうだ。弥生時代になると、稲作の技術は急速に日本列島に広く広がっていき、主食がお米になる転換期だったと考えられているそうだ。弥生時代からとても長い期間、日本人の主食として親しまれているということとはとてもすごいことであり、とても驚いた。

ぼくは、そんなお米が大好きだ。なぜなら毎日食べても決して飽きることがなく、そしてどんなおかずと食べてもおいしく感じる。これができるからだ。もちろん、ぼくはパンや麺類も好きだが、パンや麺類は、もし毎日食

べ続けていたらきつと飽きてしまうと思う。
お米なら、納豆や明太子、カレーなど、合つ
おかずがいろいろと思ひ浮かぶし、ぼくは納
豆を週に4、5回食べているがまったく飽き
ることがない。パンや麺類では、こういう飽
きないおかずのようなものはないであろう。
このように、普段、いつも必ず家にあり、
当たり前のように食べられているお米だが、
そのお米を食べられるような状態にすること
は、時間がかかる。このことは、小学校のと
きにっつくばスタイル科^レの授業で体験した
田植えや稲刈り、社会科の授業などを通して
知った。その時、田植えや稲刈りを実際に体
験して、米作りの大変さを改めて感じ、お米
に対する考え方が大きく変わった。まず、春
に田植えをした。田植えでは、田んぼの泥の
中に素足で入り、苗を植えた。泥の中に入れ
た足の感覚は、今までに感じたことのないよ
うなものだった。それから数カ月が経ち、秋
になった。稲刈りをするために田植えをした

場所に行ってみると、苗から稲に大きく育っていた。その力強い育ち方に、ほくは驚き、また自分が植えた苗が育ったことに大きな喜びを感じた。稲刈りでは、鎌などを使って、一つ一つ丁寧に刈っていた。この作業はずっと低い姿勢で行うので、田植えほどではなかったが、やはり腰が痛くなつてとても大変だった。そんな苦労もあったが、最後にはたくさんの稲がとれて、うれしくなつた。ほくの小学校では、その稲刈りで取れたお米を「おもちゃ」にして、十月の「収穫祭」というイベントのときにもちつき体験を行ってきた。これは、一年生から六年生まで全校児童が染しめるイベントだった。このように、小学校で体験した田植えや稲刈りは、自分にとってはとても貴重な体験であり、お米のことを改めて考える機会となった。

また、日本人が主食として食べているお米のほとんどが日本国内で作られているということ、五年生のときの社会科の授業で学習

した。食料自給率が、消費量の97%にもものぼるそうだ。これは「肉」や「野菜」などの割合と比べても、非常に高い。お米の輸入量は、とても少なく、過去の実績を見ても1970年と1990年の20年間は、輸入量はほぼ0という状況であったそうだ。自分の国でほとんどを生産できるところこそ、お米は日本の主食になっ、てい、るんだなあと思った。

日本の食文化も変化している。お米を食べなくなっ、てきている人も増えているという話も聞いたことがある。しかし、古くから日本人の主食として親しまれてきたこのお米を、ぼくはこれからも大切にしていきたい。

今日もぼくの家の食卓には、おいしそうな白いお米がいろいろなおかずと共に並んでおり、家族みんなが笑顔でそのお米を食べている。